

様式第 4 号（第11項関係）

西脇市審議会等の会議の記録

審議会等の名称	令和 8 年度 第 1 回西脇市こどもプラザ運営委員会
開催日時	令和 8 年 8 月 4 日（火） 午後 2 時～ 3 時 30 分
開催場所	西脇市茜が丘複合施設Miraie 会議室 1
出席委員の氏名又は人数	10人
欠席委員の氏名又は人数	0 人
出席職員の職・氏名又は人数	4 人
公開・非公開の別	公開
非公開の理由	—
傍聴人の数	0 人
議題又は協議事項	1 こどもプラザの利用状況について 2 令和 7 年度事業実績報告について 3 令和 8 年度事業実施計画について 4 こどもプラザの運営について（意見交換）
会議の記録（概要）	
発言者	○開会 ○理事あいさつ ○委員委嘱 理事から委員に委嘱状を交付 ○委員紹介 委員による自己紹介
事務局	
理事	
会議の記録（概要）	
発信者	○委員長・副委員長の選出 西脇市こどもプラザ運営委員会条例第 6 条第 2 項の規定に基づき、委員長、副委員長を選出。

事務局	委員長、副委員長を選出 ○委員長、副委員長あいさつ ○会議成立の報告 委員10名の出席により委員会成立の報告 ○傍聴者の報告 傍聴者なし
委員長	○議事 議事1、こどもプラザの利用状況について、事務局から説明をお願いします。
事務局	○会議資料1に基づき、事務局から説明
委員長	議事2、令和7年度事業実績報告について、事務局から説明をお願いします。
事務局	○会議資料2に基づき、事務局から説明
委員長	議事3、令和8年度事業実施計画について、事務局から説明をお願いします。
事務局	○会議資料3に基づき、パワーポイントを使いながら事務局から説明
委員長	こどもプラザの運営についての意見交換をしていきたい。議事1から3を含め、何か意見等はないか。
委員	こども園では、日頃からこどもプラザと連携し、さまざまな行事や活動を行っている。お盆期間は希望保育となるため、こどもプラザを利用する子が多いと思う。 今年度から「こども誰でも通園制度」が導入された。制度開始前は、西脇市内でどの程度利用されるのか分からない部分もあった。現時点では、市内の8園すべてが受け入れている。受け入れの形態は園によって異なるが幅広く受け入れている園もあれば2歳の誕生日を迎える

	までの子どもや、生後6か月以上の0歳児を対象としている園もある。 本園では、在園していない子どもとその保護者を対象に、「すくすく子育て教室」を実施している。保護者が就労していない場合でも、年間15回から20回程度、園に来ていただき、親子で一緒に活動する機会を設けており子ども同士、保護者同士がつながりを持てるような交流の場にもなっている。参加者からは、休日等は、こどもプラザを利用しているという話も聞いている。このように、互いに助け合い、連携しながら学び合える活動できていることを大変ありがたく感じている。 夏場は暑さのため、子どもたちが屋外で遊ぶことが難しくなっている。朝から暑さ指数が高く、戸外活動ができないくらい夏の暑さは非常に厳しくなっている。そのため、こどもプラザのように、安心して体を動かし、楽しむことができる屋内の場があることは、大変意義があると感じる。今後も、このような施設や活動の場が、夏場の子どもたちの居場所として活用されることを期待する。
委員長	他の委員、意見はないか。
委員	社会福祉協議会では、さまざまなボランティアグループが、主に高齢者を対象とした活動を行っている。その中でも、子どもの居場所づくりや子ども食堂などの活動に力を入れている団体も複数ある。 数年前まで、市内の子ども食堂は2か所ほどであったが、現在では7グループが取り組んでいる。こどもプラザという切り口から見ても、子どもに対する施策が着実に広がっていることを実感している。 以前、「西脇市子どもの笑顔をはぐくむ条例」の制定にも関わったが、その際に最も難しいと感じていたのは子どもの意見をどのように聴き、施策や事業に反映していくかという点であった。こどもプラザでは、キッズ・ジュニアサポーターという仕組みを取り入れ、子どもの意見を聴きながら事業を実施している。説明にもあったように、子どもの意見を反映することで、内容に厚みのある行事が実現しており非常に重要な取り組みであると

事務局	感じている。 今後も、こどもプラザの事業がさらに広がっていくことを期待している。 出張こどもプラザ事業について聞きたい。昨年度の報告では「地域」に出向くという事業はふくまれていなかったと思う。今回、「地域」が特出しされているようだが、その理由はあるか。 以前から地域に出向いて、出張こどもプラザを実施したいと考えていたが、職員数やその他の事業もあり実現できずにいた。今後は、こどもプラザに来ることが難しい地域とも関わりを持っていきたいと考えている。 その一環として、芳田地区の町内会長及び地域づくりの代表者に、イベントの中で活動を実施できないか相談したところ快諾をいただいた。また、企業版ふるさと納税により車両を購入していただいたことで、必要な遊具を積載して移動しやすくなった。今後は、こうした活動をさらに増やしていきたいと考えている。
委員長	他に意見はないか。
委員	小学校３年生の子どもがいる。桜丘校区であるため、どの地域の活動に参加するにも距離がある。小学生であれば自転車で行ける範囲も限られており、まだ一人で行かせることに不安がある。 私自身、普段は仕事をしているため、送迎が難しく、土日に参加しようとしても予定が入っていることがあり様々なイベントへの参加が難しい。また、仕事をされている保護者の方の中には、子どもを学童保育に預けている方も多くおられる。学童保育は、子どもの人数に加えて、指導員の配置人数も関係していると思う。桜丘小学校では春や冬であっても、普段から運動場で遊ぶことが難しい状況です。そのため、子どもの活動状況について保護者としては気になる場所である。体育館で遊べる時間帯も決まっているため、子どもが十分に体を動かしているのか、ストレスを発散できているのかという点が保護者としては特に気になる。また、高学年になると、子どもに鍵を持たせて留守番をさせている家庭もある。

	そのような場合でも、学校の近くや学校と併設された場所で活動が行われていれば、子どもを通わせやすくなるのではないかと。さらに、キッズ・ジュニアサポーターの活動を知るきっかけにもなるのではないかと思います。 これだけ子どもの数が減少し、学校の数も減っていくのであれば、市や地域全体を巻き込み、学校や中学校なども含めた活動を、何年か先を見据えて検討してほしい。また、現在はSNSに関する問題も増えているため、学校が終わった後も地域との関わりが増え、子どもたちが地域の活動に参加できるようになれば、少しでもSNSから離れ、子どもたちと地域の方々とのつながりを増やすことができるのではないかと思います。
委員長	他に意見はないか。
委員	以前学校教育課で勤務していたが、放課後児童クラブは一般的には福祉部門が所管しているが、兵庫県内では佐用町と西脇市が、学校教育部門が所管している。学童は学校とは異なる役割を担っている。学童における学びや、学校、高齢者、地域団体などとの連携を考えることは重要である。また、子どもを中心に考えた場合、保護者にとっては、行政上の区分は重要ではなく、必要な支援を受けられることが大切ではないか。そのため、行政においても、担当部署の違いを越えて連携できる仕組みを工夫していく必要があるのではないかと。 学童の職員体制については、利用する子どもの人数に応じて職員数が決まっており、夏休みには特別支援の介助員が応援に入る。しかし、決して職員数に余裕があるわけではなく、限られた体制の中で運営している状況である。こどもプラザを含め、学校や地域と連携した活動を取り入れることは有効な方法ではないか。 事業実績として利用者数や実施回数などの説明を聞いた。事業についての具体的なエピソードが非常に重要であると思う。 以前、こどもプラザで開催された父親向けのクッキング講座に参加し講師と知り合った。その後も交流が続いている。また、我が子もキッズサポーターとして活動するようになったり、図書館の活動に参加したりするなど

	一つの事業をきっかけに新たな人とのつながりが生まれた。数字には表れにくい人と人とのつながりや、地域との関わりが深まっていく過程こそが、事業の大きな価値ではないか。これだけの取組を行っているのであれば、利用者数などの実績だけでなく、事業を通じて生まれた具体的なエピソードも成果として整理し、積極的に発信していくべきではないか。 地域に大型店舗や商業施設があることだけが、地域の発展や暮らしやすさにつながるわけではなく、地域の中で人と人がつながり、安心して暮らせることの方が重要ではないか。特に、若い世代にとっては、収入の高さや利便性だけではなく、「この地域には人とのつながりがある」「自分を受け入れてくれる人がいる」と感じられることが、住む場所を選ぶ上で大切な価値になるのではないか。こうした人とのつながりや地域への愛着は、ＵターンやＩターン、将来的な人口定着にもつながる重要な要素であると思う。 学校現場におけるプレイサポーターの役割について、近年、悩みや困りごとを学校にしか相談できない保護者が増えている。本来であれば友人やお母さん同士、地域の人などに相談できる内容であっても、身近に相談できる相手がおらず、学校の教員にしか話せない保護者もいる。そのような状況が、保護者の孤立感につながっているように感じる。学校に相談できること自体は重要であるが、「学校にしか相談できない」という状況を減らすためにも、学校内外に気軽に相談できるサポーターや支援の仕組みが必要であると思う。プレイサポーターのような存在が地域にいることは、子どもや保護者にとって大きな支えとなる。すべての課題を一つの機関で対応することは難しいが、複数の相談先や支援者が存在することで、子どもや保護者の孤立を防ぐことができるのではないか。
委員長	事務局から意見はないか。
事務局	職員数が限られている中で、特に夏休み期間は非常に厳しい状況ではあるが、職員で力を合わせて取り組んでいる。そのような状況の中でも、調整を行いながら各地

	域へ出向いていくことを検討している。黒田庄についても公民館を借り、実施する方向で計画を進めている。今後も、保護者の皆さまや子どもたちに満足していただけるよう検討を重ねていきたい。 実績数については、個人情報に関わるため、現状では数字が中心となる。さまざまな相談を受けたり、支援を行ったりする中で、多くの方に関わることも大切だと考えている。一方で、例えば、子育て支援を必要としておらず、ご家族だけで十分に子育てができる10組の方々に関わるのと、本当に困難を抱えている1組の方に関わることを比較した場合、私たちは、困難を抱えている保護者一人に寄り添い、支援することに大きなやりがいを感じる。そのような支援の実績や積み重ねは数値として表に出しにくい部分があるが、今後も、一人ひとりへの支援を積み重ねていきたいと思う。
委員長	他に意見はないか。
委員	児童館事業のソーイング教室には、娘も西脇高校生活情報科に在籍しているため参加した。高校生が活躍する場がみらいえにあるということは、素晴らしいことであり嬉しく思う。 妻は、神戸から西脇に嫁いできた。当時は、西脇市に知り合いが一人もいない環境で生活していたが、その際に非常に助けられたのが「日野マミィ」であった。そこでは、子育てをする保護者が数名集まって、さまざまな活動を行っていた。私も、パン焼きなどを手伝ったことがある。妻にとってはそのような場が非常に助けになったのではないかと考えている。 事業等の説明を聞き、さまざまな活動が行われていることが分かったが、私には、そのような情報がほとんど届いておらず、実際にどのような活動をしているのか分からなかった。子育てをしている家庭には情報が発信されているのかもしれないが、西脇市全体としてこのような取組を行っているという情報は、あまり届いていないように感じた。 また、学校現場のことについて言えば、現在、園小連携の中で、小学校から中学校へ進学するまでに身に付け

	たい力として、自己肯定感、自己有用感、粘り強さなどさまざまな力が挙げられている。そのような中で、今回の話を聞き、子どもの声を聴くことを大切にしたい、キッズ・ジュニアサポーターの活動が行われていることを知った。そうした活動を通して、「自分たちでやり遂げることができた」「自分にもできる」「自分が周りの人に認められた」という経験を積むことは今後、子どもたちにとって役立つのではないかと思った。 一点聞きたい。日野地区では、出張こどもプラザは実施しないのか。
事務局	日野地区会館（サンパル日野）には、遊具を持参する予定である。またNPO法人みなみ会に、事業委託している夏休み期間の学習支援では20名から30名近くの子どもたちが自転車で通っている。
委員長	他に意見はないか。
委員	私の出身は滋賀県で、上の子が1歳のときに西脇市へ引っ越してきた。右も左も分からない中での子育てであったが、子育て学習センターがあり、そこで人とのつながりを教えてもらった。その関わりは子どもだけでなく大人に対する学びにもつながっており、人とのつながりの大切さを知ることができた。また、子育て学習センターが、人と人をつなぐパイプ役を担っていたことも大きかった。現在もそのつながりが子どもたちの成長に生かされ、継続していると感じている。そのおかげで、楽しく子育てを続けることができている。これからの若い世代や子育て世代にも、このような環境を知ってもらい、西脇市で楽しく子育てができる環境が、これからも続いていけばよいと思う。 キッズ・ジュニアサポーターでは子どもの意見や思いを十分にくみ取ってもらっていると感じている。さまざまなことが多様化する中で、職員も同じように安心できる環境で子どもたちと関わるができる仕組みが必要であると考えます。今は、子どもも保護者も意見を率直に伝える時代であり、職員がさまざまな意見を受け止めながら対応する場面も多いと思う。そのため、職員も安心

	して働き、子どもたちと関わるができるような仕組みがあればよいと思う。 こどもプラザでは、夏休みにヤクルトへの訪問や施設見学など、いくつかの事業が計画されていたと思う。しかし、こどもプラザなどの集合場所まで来ることが難しい子どもも、市内にはいるのではないかと感じている。例えば、学童保育への送迎ルートを設定するなど、遠方の学校や学童保育を利用している子どもも参加しやすい仕組みがあれば、より多くの子どもが事業に参加できるのではないかなと思う。 キッズサポーターについては、地域の中で活躍できる場として、非常に貴重な経験をさせてもらっている。今後、中学校の部活動が地域展開されるに当たり、キッズサポーターのように、地域に密着した形で子どもたちが関われる仕組みがあればよいと思う。例えば、「西脇大好き部」のような活動を中学生向けにも展開し、子どもたちがより気軽に地域と関わるができれば、西脇市のことを知り、地域で活動する機会がさらに広がるのではないかと感じている。 西脇市内の小学校で不登校支援に携わっているが、子どもが学校に行きにくい、あるいは学校生活を送りにくいという状況になった場合、支援者は保護者や子どもと一から関係性を築いていくことになる。しかし、話を聞いていくと、子どもが幼少期からさまざまな悩みを抱えていたことが分かる場合がある。こどもプラザのコンシェルジュへの相談が、関係機関と連携しているのであれば、こども園などともつながることで、子どもへの支援がより早期から、かつ継続的に行えるのではないかなと思う。子どもたちの将来に向けた支援が、少しでも円滑かつ継続的に行われることを期待する。
委員長	他に意見はないか。
委員	こどもプラザの事業の情報が、こどもプラザに来ないと伝わってこないと感じていた。今日初めて、LINEやFacebookで情報発信されていることを知った。知り合いの中には、「みらいえ」に行ったことがない母親も多くFacebookなどで情報発信されていること自体を知らない

	保護者もいると思われる。そのため、現在実施している事業について、より多くの保護者に知ってもらえるように、周知方法の工夫が必要だと思う。現在の方法だけでは、情報に気付かない人もいるのではないか。さまざまな事業を実施しているので、より幅広く周知していただきたい。 私自身、子育て親子教室や重春野村地区マミィなどに参加する機会があり、子育てに大いに役立った。保護者同士のつながりをつくるための最初の一步を踏み出すことは、非常に難しいと感じる。そのため、健診の際などに、事業や交流の場について一言声をかけていただけると、参加への一步を踏み出すきっかけになると思う。今後は、そのような声かけも積極的に行ってほしい。
委員長	他に意見はないか。
委員	私は、3人の子どもを育てる中で、こどもプラザのような場がなければ、これまでとは全く異なる子育てになっていたと思うほど助けられてきた。一方で、支援を必要とする人ほど支援情報に接する機会が少ないという格差の存在を感じている。情報発信は十分に行われており健診の際にも資料を配布されているが、本当に困っている人に支援を届けることの難しさを感じている。 私の住んでいる地域は西脇地区で、市内の中心部ではなく、黒田庄、芳田、板波などはより、子どもたちが遊びに行くためには車で移動しなければならない地域もある。そのような地域では、子育ての負担がより大きい人も多いのではないかと思う。職員の方々がさまざまな地域に足を運んでくださっていることは、大変ありがたいことである。今後も継続してほしい。 現在、外国にルーツを持つ方は来館されるか。
事務局	芳田地区から、外国にルーツを持つ方が利用されることがある。日本語もとても上手に話される。
委員	市内ではここ数年、外国人の家族が増えている。アジア圏の言語が通じにくかったり、生活習慣が異なったりすることから、町内会に加入していない家庭もあるが、

委員	乳幼児を抱える家庭が増えている印象がある。そのような家庭がどのように情報を得ているのか気になる。今後は、西脇市が外国にルーツを持つ家庭と地域をつなぐ架け橋となる必要性も高まるのではないかな。 昨日、外国にルーツを持つお子さんが入園するため、説明会があり、通訳として日野こども園を卒園されたお子さんの保護者が通訳として一緒に来られた。以前、偶然訪れたその方の出身国の料理について話題にしたところ、お母様の表情が途端に明るくなった。食育は、言語や文化の違いを越えて、無条件に受け入れられる部分があると感じた。例えば、外国にルーツを持つ家庭と日本人家庭と一緒に料理を作り、温かい雰囲気の中で交流できる行事を設ければ、保護者同士のつながりづくりにもなるのではないかな。 学童保育については、先行して話を進め過ぎることは注意が必要である。しかし、私たちのこども園は社会福祉法人が運営しているため、収入がなければ運営を継続できない。少子化が進む中、こども園としても多角化を図らなければ、今後の運営が難しいのではないかなという話を園長同士でしている。現在も、夏休み期間中のみ学童保育に近い形で、事業を実施している園がある。将来的に事業を多角化する中では学童保育は最も取り組みやすい分野の一つではないかと考えている。子どもたちにとっても、小学校1年生をはじめとする学童保育の中心年齢層は、前年度までこども園に通っていた子どもたちである。これまで関わってきた保育者が引き続き支援することで、子どもたちも安心して過ごせるのではないかな。こうした取組については、数年先を見据え、園長同士で相談を進めているところである。
委員長	社会福祉学を専門とし、これまでソーシャルワーカーとして支援に携わってきた経験から、支援の実態を把握するためには、数値による評価も重要であるとかんがえる。支援に関するエピソードの件数や、利用者の満足度などを指標として活用することで、支援の実態をより具体的に把握できる可能性がある。今回の事業実績においても、支援に関する件数や満足度など、可能な範囲で数

理事	値化した情報を提示することで、さまざまな実態が見えていくのではないかと。 各委員から出た意見等を、今後の運営に反映させてほしい。 ○議事終了 委員の皆様から、多くの貴重なご意見をいただいた。今後の事業運営に反映していきたいと思う。 次回の委員会は令和9年2月を予定している。 議事録については、要点をまとめ、ホームページなどで公開予定である。 ○閉会
問合せ先	西脇市福祉部はぴいくサポートセンター こどもプラザ TEL 0795-25 - 2801 / FAX 0795-25 - 2220